

洲から駆逐撃攘し、日本をして東洋の一孤島たらしめやうとする深謀の下に方攻めにして来たのであるから、其の勢ひ當るべからざるものがある。獲かに一個師團の兵力を以て、日本里程七里に亘る戦線に氷雪の艱苦を嘗めながら、防備から攻撃に轉するまでの努力は、筆紙の能く盡すところでない。

波濤の如く寄せてはかへす敵の大集團に對して大礮石の如く之を防ぎ、更に敵の虚に乗じて奔濤の威壓を加へるところ、そこに天に沖する飛沫も起り、地軸に響く震動も生ずる、帝國の興廢は第八師團今日の勝敗に在りとは、大將の炯々たる眼光に視示されて、屍壘と血彈とを以て敵を撃破するの外はない、師團の名譽も我等の名譽、盡忠報國の大義に殉する決意が漲つた。

明日たごひ身骨を粉齏するも、黒溝臺を攻撃して勝利を得ざるべからず。此の訓令を下した大將は、

二十七日拂曉から戦闘は開始され、前日より一層激烈である。味方は司令部附近の地點を砲兵陣地として、放列を布いて極力攻撃した。敵も亦照尺確的なる砲火を報ひて来る、見る／＼司令部は砲彈の集中點となつたから、衛兵

も立見將軍の身を氣遣ひ、其の居室を安全にすべく構作に取り掛かつた。

將軍は巻煙草を口に啣へ、司令部を出ては満面に微笑を湛へ、大分砲彈が来るなど歩みながら、神色自若、少しも平生と變らない、而して將軍は衛兵の造つた居室に入らうともせず、司令部附近の砲兵陣地に行つた。

黒溝臺の戦ひ、我軍砲列を師團司令部の前面に布き、盛んに蘇麻堡方面の敵を苦しめしに、敵軍の砲火も亦我が砲列を目標けて必死と打出だししかば、司令部の前後左右には敵彈頻りに落下し來り、アワヤ其幕舎も危げに見えければ、若し立見將軍に萬一の變あらんことを慮り、司令部内に別に安全なる避難所を設けて之に招じたるに、將軍は諾して猶之れに赴かず、轟々たる砲彈の爆聲を聞きつつ、いとも鷹揚にシガアを煙らせながら、随分砲彈がやつて来るなアと少しも意に介せざるもの、如し其の呑氣なる調子、其の悠然たる態度、何者の豪者かよく之に比せん。

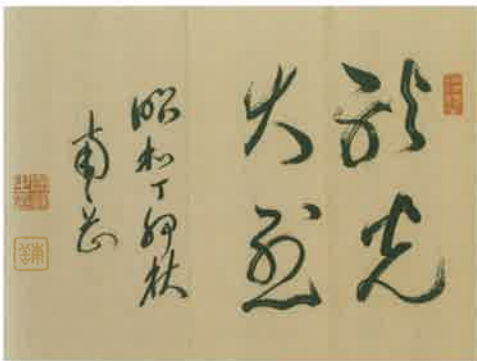
殆んど眼中敵を弄ぶものの如くである。然れども大將が各部隊に下した訓令

第七章 日露戦役

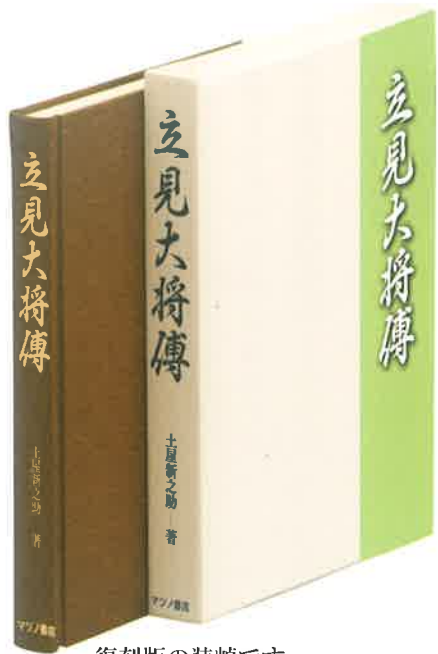
110K

内容見本

(70%縮小)



▼本書は小社の「復刻希望アンケート」ではこれまで「持っている」人が一番少ない本です。また地元三重県内でも桑名市立図書館以外には無く、もちろんどこの古本屋にもない珍しい本でもあります。  
▼「火車日誌」に書いたような事情で、予約締切を待たずに印刷を始めます。あしからずご了承願います。



復刻版の装幀です (デザイン・毛利一枝)

■ 体 裁	A5判上製箱入 315頁
■ 定 価	一万円(税込・〒別)
■ 予約特価	八千円(税・〒共)
■ 特価締切	22年10月31日
■ 刊 行	22年12月上旬

限定三百部 (番号入)

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK  
山口県周南市銀座2-13  
0834-2295 マツノ書店  
URL <http://www.matsuno.com>

戊辰戦争から日露戦争まで…

すべての戦いに圧勝した名將軍の

入手困難な唯一の伝記、ここに復刻!



土屋新之助 著

立見大將傳



立見大將午睡の錦絵

マツノ書店

●「申込ハガキ」にあるセット特価をご利用下さい。



### 常勝将軍・立見尚文

東大教授 山内 昌之

日本史上、不敗の将軍がいた。その人こそ、桑名藩出身の立見尚文である。

立見鑑三郎こと尚文ほどの軍人は世界史でも滅多に出るものではない。彼は、幕末から明治を生き抜いた最高の指揮官と謳われる。

日露戦争の第四軍司令官、野津道貫は、薩摩の出身だったが、藩閥外の立見を「東洋一の用兵家」と高く評価したほどだ。

幕末の江戸で立見に近代兵学を教えたフランス人教官は、「ナポレオン時代のフランスに生まれていたら、三十歳になる前に將軍になつただろう」と激賞したものである。

立見に関する本格的な評伝を書いた歴史家はいない。少し前に、小学館の『サビオ』誌で日本最強の軍事指導者を選ぶアンケートに答えたことがある。私は躊躇なく立見の名を上げた。そして、同じ問いを受けた旧知の直木實作家、中村彰彦氏に向かつて、「誰を選んだのか」と尋ねると、氏も立見を挙げたので二人で大笑いしたものだ。

立見の軍歴は、戊辰戦争から西南戦争を経て、日清日露の戦役に及んでいる。確かに、立見の桑名藩は、鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍の主力として戦いながら、敗北を喫した。しかし、桑

名に弱将や弱兵はほとんどいなかったようだ。主戦派は、飛び地のある越後（新潟県）の柏崎に移って抵抗を続けている。この時、二四歳の立見が率いた七五人の雷神隊など三五〇人ほどの桑名勢は、朝日山に迫った一千人の新政府軍を散々に打ち破った。奇兵隊の時山直八が戦死したのはこの激戦においてである。

参謀の山県有朋が年来の同志時山を失ったショックは大きく、立見の昇進を何かと妨害した山県のこだわりは、朝日山の敗戦から始まったといつてよい。

山県の名誉のためにも一言加えておかなければならない。それは、歌人山県が朝日山の戦を詠みこんだ名歌のことである。しかし、この陰翳に富む歌は、山県の心に反して敵将の並々ならぬ力量を想像させる逆の効果を生んでいる。

あだまもる 砦のかがり影ふけて  
夏も身にしむ越の山風  
まるで、立見の颯爽とした姿をシルエットのように浮かび上がらせる歌ではないか。

降伏後の立見は、やがて司法省に出仕し、下級判事などを務めた。しかし、各地で不平士族の反乱が相次ぐと、かつての敵だった明治政府に請われて陸軍に迎えられたのである。なにしろ、唯一人の陸軍大将西郷隆盛はじめ高級軍人の出身地薩摩が反乱を起こした今、「朝敵」とか「賊軍」といったレッテル貼りにもはや拘泥してはいられなかったのだ。

西南戦争では陸軍少佐として新撰旅団一個大

隊を指揮し、日清戦争では陸軍少将で歩兵第十旅団長を経験したが、いずれも将兵に対する際立った統率力と感化力を発揮した。

立見の名を不朽にしたのは、日露戦争のとき黒溝台の戦線左翼で壊滅の危機に瀕した秋山好古の騎兵部隊を支援した戦いであろう。厳寒に鍛えられた第八師団（弘前）を率いる立見は、師団の総力を挙げて夜襲する世界戦史で破格の作戦を指揮した。二万人が夜に奇襲を仕掛ける作戦を考え付いたのは、立見の才と天性のひらめきがあったればこそであろう。

この時、命令受領者を集めた立見は話しているうちに興奮も極まり、演説台の代わりにした「支那箆筒」を思わず足で踏み破ったほどだ。立見は多数の犠牲者を出しながらも屈せず、臨時立見軍を編成し、ロシア陸軍を分断して最後には退却させたのである。

零下「40」度の厳寒で高齢の将軍が戦地に立つのはつらい。それなのに、立見が陣頭で指揮を取り続けた粘り強さは、その後の驕り高ぶった昭和の将官にはないものだ。ロシア軍の圧倒的な優勢を退け攻勢に転じたのは、我慢強い東北の精兵の戦闘意欲に加え、「立見がいたからだ」という風評が東北の農村で後々まで語り継がれる伝説になったのである。

これまで入手が絶望とされた唯一の伝記が今回、マツノ書店の芳志によって初めて復刻されることになった。その刊行が待ち遠しいことである。

### 立見大將傳

十一月二十七年の中旬頃、鳳凰城に大將を訪うた従軍記者の筆記に、

立見旅團長は、静容温雅能く客と談じ、又兵勢軍事を語る、聞く所ありと雖も今之を公示するを得ず、然れども其一端を摘記せんに、曰く、食糧、兵器充備し、地勝人和を得て戦を爲すは、是れ普通の道なり、名將は百難の襲來を排斥し、尋常爲し能はざる道を行うて勝を制す、今の兵學者は多く歐洲文明的の教育を受けたるものなり、支那の敵は此の文明的の兵學を適用するを得ず、時に臨み機に應じて變化せざるべからず、要は只敵を惱まし且つ破るに在り、以て將軍の胸中如何を推知するに足るべし、若し夫れ將軍の語を以て活動せしめんか、吾人更に驚嘆壯快を感ずる事あらん、然れども軍に制あり、規あり、自由に進退操縦を得ず。將軍の雄膽傑策、徒らに畫餅に屬せざらん事、國家の爲め、我軍の爲め、切望に堪へざるなり。

鳳凰城附近にて優勢の敵と對峙す、然るに彼れ立見少將馬上悠然、部下に語つて曰く、彼の容子にては敵の好距離に入る迄は二三十分間はあつたべし、其間に余は睡るべしとて、ヒラリと飛び降り、松の根を枕に横はりしが、間もなく轟聲轟轟たるに至りしと。



## 『立見大将傳』の伝える名将の姿

作家 中村 彰彦

慶応四年（一八六八）一月三日に勃発した鳥羽伏見戦争にはじまり、明治二年（一八六九）五月十八日の箱館五稜郭の開城におわる一連の戦いを戊辰戦争という。この間、明治新政府軍（西軍）と戦いつづけた東軍といえば旧幕府脱走軍および奥羽越列藩同盟参加諸藩のことだが、まだどちらが勝つかわからなかった時点で、東軍の中では「佐幕派強い者番付」といわれるものが二種類作られた。

「第一桑名、二佐川、次之者衝鋒隊」（中村武夫『泣血録』）

「一に衝鋒、二に桑名、三に佐川の朱雀隊」（『衝鋒隊戦史』）

桑名とは桑名藩十一万石松平家の兵力のこと、佐川とは会津藩朱雀四番士中隊の隊長佐川官兵衛のこと、衝鋒隊とは坂本龍馬を斬った男として知られる今井信郎らの参加した旧幕府脱走軍のひとつである。

桑名藩は越後柏崎に六万石の飛び地領を持っていたため、桑名城が降伏開城したあともこちらへ移って戦いつづけた強力な部隊があった。名づけて雷神・致人、神風の三隊であり、そのリーダー格として雷神隊長をとめたのが立見鑑三郎のちの尚文であった。

慶応四年閏四月二十七日、右の三隊を主力とする東軍四百は、柏崎に近い鯨波で西軍一千人以上と交戦。西軍死傷者が五十余人に達したのに対し、桑名藩は戦死三人、負傷七人しか出さなかった。これは軍事奉行を兼務していた立見尚文のリーダーシップによるところが大きい。

さらに同年五月十三日、越後長岡の西の要衝朝日山に集結した東軍は、信濃川の激流をはさんで西軍と対戦。長州藩奇兵隊の時山直八が濃霧にまぎれて渡河攻撃を決行すると、立見はこれに気づいて号令した。

「よいか、者どもよく聞けい。すでに敵兵十五、六人は討ち取り、分捕り品などは数知れぬ。もはや味方は充分の勝利なれど、なお奮闘してひとりも残さず討ち取れ！」（小著『闘将伝 小説立見鑑三郎』（角川文庫）参照）

これは大嘘であり、はったりである。だが、時山隊は驚いて敗走してしまい、時山自身も戦死した。山縣有朋は盟友の死を知るや、慨嘆のあまり一首詠んでいる。

あだ守る砦のかがり影ふけて夏も身にしむ越の山風

山縣の戊辰戦争回想録は『越の山風』という題名だが、かれに東軍の強悍さを見せつけたのは立見だったのである。

本書『立見大将傳』はその立見尚文の全生涯を描いた唯一の伝記であり、章立ては「第一章 少年時代」「第二章 青年時代」「第三章 戊辰の変」となっていて、雷神隊の動向は第三章で語られている。

つづいて「第四章 司法官時代」では、明治六年以降司法省に出仕していたかれが、十年二月に西南戦争が起こるや陸軍歩兵少佐に任じられ、新撰旅団の参謀副長として薩軍討伐におもむいた事情が記述される。同年九月二十四日払暁、西郷隆盛ら薩軍生き残り四百数十人の籠る城山の岩崎谷へ突入した攻撃兵千三百余の指揮官は立見少佐。かつて戊辰の賊徒とみなされた者のひとりだった立見は、その九年後に維新回天の英雄から賊徒首魁となった西郷を討ち取って雪辱を果たし、錦絵にも描かれて時の人となったのだ。

陸軍の中で闘志の人として一目も二目もおかれた立見が順調に出世してゆく姿は、「第五章 佐官時代」に詳しい。しかし、何といっても本書の読みどころは「第六章 日清戦役」と「第七章 日露戦役」なので、ここでは明治二十七年六月に陸軍少将、歩兵第十旅団長に任じられてからのその戦歴を見ておこう。

立見が同年八月に朝鮮半島の仁川に上陸した時、すでに日本陸軍は朝鮮の首都漢城（今のソウル）を奪い、平壤めざして北上しようとしていた。この時も立見支隊は強く、総攻撃当日の九月十五日には平壤東方の牡丹台の砲壘を抜いて清の將軍左宝贵を討ち取り、勢いに乗って平壤一番乗りを果たした。立見は路傍で泣いていた孤児を馬上に抱き上げて進んだので、このエピソードは名将ならではのこととして日本に伝えられた。

さらに北進し、樊家台という寒村を谷底に見る雪深い山間部で黒龍江將軍依克唐阿の兵力三、四千と対峙した際、立見支隊は兵力千三百に満たなかった。前方左右の高地から有力な敵に挑まれたら、すみやかに転進するのが常識である。だが、立見は支隊を右翼、本陣、左翼に三分。敵軍の命中率が低いと見て左右高地の敵を

無視し、その本陣の置かれていた樊家台に中央呐喊をおこなわせて勝ちを制した。

人呼んで「樊家台の新戦術」。これに驚いた野津道貫陸軍中將は、

「立見中將は東洋一の用兵家だ」

とコメントし、アメリカの『ニューヨーク・ヘラルド』紙も立見を「日本随一の戦術家」と呼ぶことをためらわなかった。翌年七月に凱旋帰国したかれが男爵を授けられて華族に列し、功三級金鷄勲章と勲三等旭日中綬章を受けたのも、当然のことであろう。

明治三十年十月、陸軍中將に進み、新設の弘前第八師団の初代師団長となった立見は、すでに立志伝中の人物であった。ところが、三十七年二月四日の御前会議で対露開戦決定となり、還暦を迎えて「銀髯將軍」と渾名されていたかれは、十年ぶりに朝鮮から満洲へと駒を進めた。

あけて三十八年一月、日本軍が旅順を占領して満洲を北上すると、クロパトキン大将率いるロシア軍三十数万は奉天（今の瀋陽）付近まで南下、兵力二分の一以下の日本軍を一気に叩こうとした。そのコサック騎兵は世界最強と自他ともに認めるばかりか、雪と寒さにも強い。一部は奉天から西南へ流れる渾河が氷結したのを利用して南岸へ渡河し、黒溝台という集落を占領して前線基地とした。

大山巖をトップとする満洲軍総司令部は読みがあまりに浅く、この動きをただの強行偵察としか見ていなかったから始末が悪い。一月二十五日、立見師団に黒溝台攻撃が命じられた時、この方面のロシア軍は八個師団にまでふくれ上がっていた。しかもロシア軍には速射砲と機関砲が多数配備されており、日本軍はいたずらに雪原を朱に染めるのみ。にもかかわらず砲弾を恐れもせず悠然と指揮していた立見に、大山総司令部がようやく三個師団の援軍を急派すると決めたのは二十八日のことであった。

この援軍を両翼に配した立見師団は、ようやく得意の中央突破に専念できることになった。それでも彼我の兵力比は二対一であったから、二十八日早朝、立見は悲壮な命令を下した。

「第八師団の各部隊は予が訓示を銘心し、仮令多大の損害を蒙るも、決意超然、大いに攻撃を遂行し、師団の名誉を失墜せざらんことを望む」（第七章）

だが、ロシア軍も大反攻に転じ、日本軍は不利な戦況を打開できない。苦境を脱するには強襲につぐ強襲あるのみと戊辰鯨波戦争以来信じていた立見の戦い方は本文に譲ることにして、ここでは決死隊を編成して敵へ五百メートルの距離から銃剣と刀による夜襲を展開した日本軍の前に、ロシア軍がついに敗走した事実だけを示しておく。

立見師団の死者千五百五十五に対し、ロシア軍の遺棄死体は七千八百三十余。立見は兵たちを慰労すべく、しゃれた狂歌を作った。

黒鳩が蜂にさされて逃げ去れりもはや渾河と立ち見けるかな

戦後、立見が陸軍大將に進んだのも当然のことだが、日本で大山巖、児玉源太郎、乃木希典らが英雄視されるに至ったのに対し、欧米の評価は「日本陸軍の勝利は黒溝台の戦いで決まった」というもので、その最大のヒーローは立見尚文とされている。

戊辰、西南、日清、日露の各戦争を戦い抜いた名將の生涯を描いた本書は、昭和三年、日正社から刊行されたものの、それは非売品としてであり、一般には知られていなかった。

このたびマツノ書店から復刻されることにより、立見將軍の雄々しい姿が忘却の淵から蘇ることを『闘將伝』の作者として喜びたい。



陸軍中將 立見 尚文 時代

### 立見大將伝 目次

第一章 少年時代	第二章 戊辰の変
一 修養	一 幕府の衰亡
二 時勢	二 死節報効
三 江戸勤番	三 雷神隊
第二章 青年時代	第四章 司法官時代
一 京都勤仕	一 官吏生活
二 征長従軍	二 西南役従軍
三 諸藩応接	第五章 佐官時代
	第六章 日清戦役
	一 平壤攻撃
	第七章 日露戦役
	一 台湾総督府軍務局長
	二 黒溝台の戦闘
	三 奉天会戦
	第八章 逝去及び余栄
	余録